



Title	聞いてあげる、答えてあげる：レッツ! 聞き上手母さん(1)
Author(s)	仲, 真紀子
Citation	ファミリス, 2008(5-6), 22-23
Issue Date	2008-05
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/44751
Type	article
Note	編者：社団法人 静岡県出版文化会
File Information	LKK2008_1.pdf



[Instructions for use](#)

聞いてあげる、答えてあげる



北海道大学大学院教授
仲 真紀子

笑

いをとったり、理路整然と話したり、人を魅了する話し方ができるというのほうらやましいものです。「話し上手」になりたいと思う人はたくさんいるでしょう。では、「聞き上手」についてはどうでしょう。聞き上手というと、人の話に耳を傾けているだけ、たいくつな人、というイメージがあるかもしれません。

けれども、心の悩みを真剣に聞いてくれたり、自分の考えを聞いてまとめてくれたり、話しているうちに自分でも気づかなかったアイデアが出てくるような、そんな聞き上手の人に出会えたらどんなにうれしいことでしょう。

そして、もしもそんな人が自分のお母さんで、毎日、思いつきりたくさんの話を聞いてくれたとしたら……。これから6回にわたり、「聞き上手」とは何か、どうすれば「聞き上



(イラスト/村松麗子)

手」になれるのかを考えてみたいと思います。

今

月のテーマは、「豊かな語りかけよりも豊かな応答を」です。語りかけよりも相手の言葉に適切に反応することの重要性について、述べたいと思います。

よく、子どもの言葉を育てるには、豊かな言語環境が大切ということが言われます。たしかに絵本の読み聞かせや、本や新聞のある環境、「しなさい」という命令形や、「しなくてはだめ」という禁止形よりも、複雑な話しかけ(「もしも」「なぜならば」など)をすることなどが、言葉の発達には重要だと言われます。けれども、どれくらい話しかけるかだけでなく、どのように応答することも重要であることが、近年の研究により明らかになってきました。

たとえば、子どもが言葉を覚えるときのよすを観察してみましょう。子どもはひとりでも言葉を感じた、と感じておられるお母さんも多いのではないのでしょうか。

実際、周りの大人が幼児に「これは○○というのよ」「これは△△よ」と教えることは、あまり多くありません。子どもが「あ、これ何?」と尋ね、母親が「○○よ」と答える。そうやって言葉を学んでいくことが多いようです。子どもがアクションを起こし、それに対して大人が応答する。そのことが重要

であるように思われます。

私

は「1枚、2枚」の「枚」、「1本、2本」の「本」といった、数とともに用いる言葉(助数詞といえます)の習得過程を調べたことがあります。助数詞は抽象的な言葉なので学ぶのが難しく、小学生でも適切に使用できないことがあります(キリンを「1キリン、2キリン」と数えるなど)。

こういった助数詞を、幼児がどのように学ぶのかを調べたところ、ここでも子どもがアクションが先にありました。子どもがお皿を「3!」と数える。すると母親は「そう、3コね」と、子どもの言葉を否定することなく、簡単な助数詞「コ」を示します。

もしも子どもがお皿を「3本!」と数えれば、母親は「そう、3枚ね」とより適切な助数詞を用います。「これは枚と数えるのよ」などと教えることはまれでした。

大人が「しなさい」「しなさい」と言うのよ」と教えても、子どもの側にはまだニーズがないので、情報が十分に理解されません。けれども、子どもがアクションを起こし、それに対して与えられた応答は、まさに子どもの状態に見合った内容であり、子どもの心に届くように思われます。

子どもの状態に見合った「適切な応答」は、聞き上手の第一歩だといえるでしょう。

●なかまきこ ●福岡県生まれ。北海道大学大学院文学研究科教授。認知心理学、発達心理学専攻。母子会話、子どもの記憶に関する心理学研究のほか、子どもの司法面接、目撃証言などの研究を行っている。主な編著訳書として「目撃証言の心理学」(共著、北大路書房)、「子どもの面接法—司法手続における子どものケアガイド」(アルドリッジ・ウッド著、仲編訳、北大路書房)など。

